

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ベルリンのグラフィティ：都市空間に描く (私のスケッチ・ブック (27))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00005910">http://hdl.handle.net/10502/00005910</a>

## ベルリンのグラフィティ ——都市空間に描く——

国立民族学博物館 助教授  
森 明子

### ■ストリート・アート

ヨーロッパの都市風景を構成する要素のひとつにポスターがある。日本のポスターよりも大型で、数も多い。その斬新なデザインや色彩は、通る人の目を楽しませてくれる。

これとはまったく異種の図像も都市空間に存在する。壁面に直接、絵や文字が描かれるもので、そのなかにはアートといえるものもあれば、いたずら書きとしか思えないものも含まれている。

壁に描かれた絵や文字は、ポスターといくつかの点で異なっている。ポスターが専門家のデザインしたものを、工場で大量生産して、いくつかのコピーが作られるのに対し、壁の図像は、プロとはいえない人の手で、ひとつひとつ描かれる。ポスターは一定期間を経過すると、新しいものに取り替えるが、壁の図像は、壁を塗りなおさない限り、ずっと残ることが前提とされている。

何よりも異なるのは、それが発するメッセージである。ポスターの目的は広告という商業活動にあるが、壁の図像は、

描いた人の政治的立場や美意識を主張する。ベルリンは、壁に描いた図像の多い都市である。

その端的な例に、ベルリンの壁がある。ベルリンの壁は1961年に有刺鉄線によって東西ベルリンの交通を遮断したのが始まりで、1975年に155キロメートルに及ぶ石壁が完成した。この壁が1989年まで、世界を東西に分断する冷戦の象徴になった。壁の東側は幅100メートルの無人地帯で、立ち入り不可能であったが、西側は接近可能だった。その壁に絵や文字を含む政治批判の「落書き」がなされるようになり、やがて政治文化的にも興味深いストリートアートが形成された。

ストリートアートになったベルリンの壁は、いまや観光スポットのひとつになったが、都市空間に描かれる絵や文字が、つねに歓迎されるわけではない。むしろその逆で、集合住宅や公園の壁、記念碑像や地下鉄の車体、はてはバス停や公衆電話、ゴミ箱にいたるまで、ありとあらゆるものが、絵や文字を描くキャンパスになる。その多くは、所有者や管理者の目を盗んで行われていて、書かれたほうは、



落書きを阻止すると同時に、グループの活動を表現した壁の絵

はなはだ迷惑している。グラフィティと呼ばれるものの多くが、この範疇にはいる。

### ■若者文化としてのグラフィティ

日本でのグラフィティの動きとしては、2003年にJR京浜東北線の車体に描かれた絵や、原宿周辺の住宅街で住民が難渋している、などの報道がある。迷惑行為としての側面が強調されて、「落書き」という語で報道された。

グラフィティとは、もともとイタリア語で落書きを意味する「グラフィト」の複数形で、壁面に落書きされた字やイメージをさす。これが都市空間に普及したのは1970年代、ニューヨークで生まれたヒップホップ文化を構成する要素のひとつとしてであった。ヒップホップは、ラップ、ディスクジョッキー、ブレイクダンス、グラフィティの4要素から成る。グラフィティは、カラースプレーを使っ

て、地下鉄や建物の壁面に絵や文字を描いた。

1970年代は、フォード式大量生産方式がゆきつくところまでいって、「第二の近代」とも呼ばれる、新しい時代の空気を感じはじめた時期であった。ヒップホップはこの時代の空気を表現した若者文化である。都市空間をキャンバスにしてスプレー缶にはいったカラー塗料で描く行為は、そのような時代のなかで意味をもっている。

さて、70年代のサブカルチャーは、社会批判、政治批判を含んだ活動であった。それが世界に広がって、さまざまな展開をとげて現在にいたる。

たとえば日本では、音楽とダンスが、近年多数のメディアにとりあげられるようになり、社会現象といえるような様相を呈している。これに比べると、グラフィティの位置づけは、迷惑な「落書き」という程度で、はなはだ低い。社会に対



1980年都市再開発計画に反対し占拠された建物。都市計画は見直され建物は残った。当時描かれた絵と文字（「我々はとどまる」）が現在もある

する明らかなメッセージを発しているとはいいたい。

グラフィティを若者文化として研究したレジーナ・ブルームは、グラフィティを生むモチーフとして、以下の5点をあげた。

- ①存在のあかし
- ②自己表現の必要
- ③集団への帰属意識
- ④美的・創造的・身体的行為の楽しみ
- ⑤退屈の表現

さまざまな都市で展開しているグラフィティが、どの要素を強くもつか、という方向から考えれば、都市によって異なるヒップホップ文化の特徴が、ある程度説明できるように思われる。

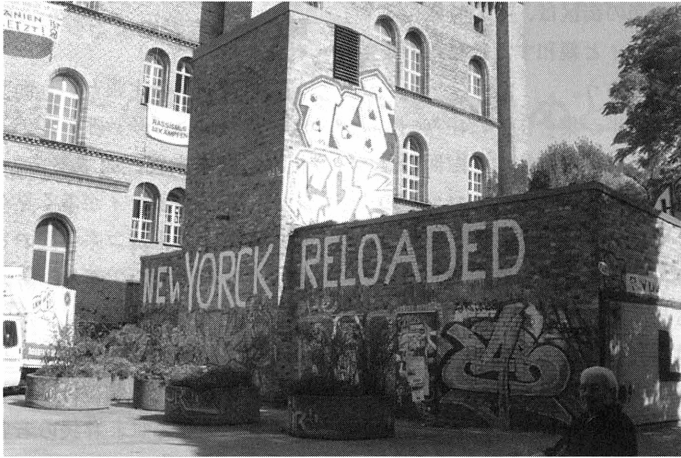
ニューヨークのヒップホップは、ギャング同士が抗争する場合の、ひとつの形にもなった。グループでダンスの優劣を競い、グラフィティによってグループの

縄張りを主張した。その場合、タグと呼ばれる特徴的なサインは、縄張りを示す実質的な意味をもった。そのタグが、東京のような都市では、単なるファッションとして描かれている。

## ■ベルリンのグラフィティ

ベルリンでも、大人たちが若者の描くグラフィティを迷惑に思っていることは、日本と変わらない。たとえば、60歳の私の友人は、グラフィティは子供じみたいたざら書きで、とうてい理解できないという。彼女は旧東ベルリンの住民で、壁撤去後はじめて、この「いたざら書き」に遭遇し、しかもそれが、壁撤去後の旧東ベルリンに、またたくまにひろまったことを、驚きの目でみてきた。

自家の壁にグラフィティを描かれた人は、当然のことながら、ひじょうに腹を立てる。その不快な気持ちは、同じ街区



2005年占拠された建物。グループの主張を記した垂れ幕がかけられ、壁面にあったグラフィティの上部に、グループの名前が大書されている

に住む近所の人々にも共有される。しばらくこの状況が続くが、やがて家の持ち主も気を取り直して、壁を塗りなおそうと思いたつ。美しい壁は近隣住民にとっても喜びである。だが、美しい無地の壁を発見することは若者にとっても喜びであるようで、新しい壁には、数日のうちに新しいグラフィティが描かれている。夜陰にまぎれて行動する若者との、いたちごっこである。

グラフィティを苦々しく思うにしても、長年それとつきあってきた旧西ベルリンの人のほうが、対応に慣れている。グループで共同運営しているある施設の壁面は、ほとんど全面にわたって人目をひく絵画が描かれている。グラフィティとは異なり、具象的な図柄を明るい色彩で描いたもので、それも素人作品である。壁面に絵を描いたのは、若者にグラフィティを描かせないための工夫である、と

いうことを聞いた。すでに別の絵が描かれてある壁面に、若者は自分のグラフィティを描こうとはしない。電車の車体であっても、無地であればこそ、キャンパスになる。グラフィティを予防する最善の方法は、先に絵柄を描いてしまうことだった。

### ■都市空間に向けて主張する

ところで、街区によってグラフィティが多くあるところと、ほとんどないところがある。金持ちの庭付き邸宅（ヴィラ）が並ぶ郊外や、知識人や中産階級が多く住む住宅地区では少ない。あったとしても稚拙ないたずら書きで、描くのに、時間も力量も必要であるような作品は見当たらない。

これに対して、歴史的な労働者地区や、移民が多く住む街区では、稚拙ないたずら書きに混じって、大作も見ることがで

きる。都市空間の街区は、その特徴によってグラフィティと親和する独自の力をもっているのだろう。

都市住民の大半が集合住宅に住み、都市のストリートが、集合住宅の隙間のない連続によって構成されるヨーロッパの都市において、ストリートに面した集合住宅の壁は、住民の意思を表明する掲示板の役割も果たす。

ときには、集合住宅の窓と窓を結んで、政治批判や主張を短いことばで記した垂れ幕を下げている光景に出くわすこともある。そこで主張されていることもまた、街区の特徴をあらわしている。

家賃や社会保障をめぐる問題がとりあげられるのは、労働者地区である。知識人や中産階級が多く住む街区では、垂れ幕を下げることはまれであるが、大規模なデモンストレーションをとまなうような大きな政治問題について、意見表明がされることはある。たとえば2002年にブッシュ政権がイラクへの武力行使を開始しようとしたときには、このような光景が見られた。

ヨーロッパの市民は、政治に対して、日本人よりはるかに強い関心をもっている。そして、都市空間を彼らの意見表明の場として、ストリートを行進したり、住宅の壁を掲示板に見立てて利用するのである。

高層建築の多い日本の都市で、情報発信の場として建物が利用される例になるのは、デパートの垂れ幕だろう。ヨーロッパと比較してみると、都市空間の利用においても、経済が政治に優先している日本の姿が見えてくる。

## ■移民の若者によるグラフィティ

都市空間への主張という面では、移民集住地区には、多数派のメディアや警察権力、資本主義、商業主義を批判する、力強いグラフィティが多く見られる。

ベルリンのトルコ系移民のヒップホップ文化を研究したアイハン・カヤは、グラフィティを含めたヒップホップは、トルコ発の彼らの文化を、アメリカ発のグローバルな文化と結び付けるもので、その交わる場所に、移民の若者は自らのアイデンティティを見出しているという。彼らのグラフィティは、正当なドイツ語でもトルコ語でもない彼ら自身の俗語による自己表現で、彼らによる領土要求を表している。

2005年秋から、フランスでは移民の若者たちの騒動が報道されている。ベルリンのグラフィティは、移民の若者が多数派の社会で経験している差別への鬱憤を、騒動とは異なる形で表現したものととして、位置づけることができるだろう。

### [参考文献]

- ・ Kaya, Ayhan 2001  
*Sicher in Kreuzberg: Constructing Diasporas: Turkish Hip-Hop Youth in Berlin*. Bielefeld: Transcript.
- ・ Blume, Regina 1985  
"Graffiti", (In) T. A. Van Dijk (ed.), *Discourse and Literature: New Approaches to the Analysis of Literary Genres*. Amsterdam: John Benjamins.